

# 中日伝統文化の比較研究

## —その大陸性と海洋性の相違点を中心に—

A comparative study between Chinese and Japanese Traditional Culture  
Focusing on the difference between its continental and oceanic characteristics

大連海洋大学

黄 桂峰

Huang Gui Feng

中国と日本は一衣帯水の隣国であり、昔から文化の交流が盛んである。その伝統文化には類似点も多ければ、相違点も多い。従来、中国と日本の文化を対象とした研究成果が数多く発表されている。しかし、この中で、中日伝統文化の大陸性及び海洋性といった視点から、その相違点の全体像を検討しているものは、非常に少ない。

本稿は、文化の決定要因としての自然環境・気候から、中日伝統文化における物質文化・制度文化・精神文化の相違点に注目し、両者の大陸性と海洋性を比較・分析することを目的とする。その結果、両国伝統文化における大陸性と海洋性の相違が著しいと確認できる。

キーワード：中国、日本、伝統文化、大陸性、海洋性

### 1. はじめに

#### 1.1 文化の定義

「文化」は「文治教化」（刑罰や威力を用いなくて導き教える）という漢語の意味で古くから使われている。しかし、今日広く使われている「文化」は、ラテン語 *cultura*（耕作・育成）に由来する英語 *culture*、フランス語 *culture*、ドイツ語 *Kultur* の訳語である（小学館：日本大百科全書）。

「文化」の定義については、いくつかの説が存在する。中国の『辞海』（1980）によれば、文化とは「広義には、人間が社会的・歴史的な実践の中で創造した物質的富と精神的富の総和である。狭義には、社会イデオロギーとそれに適したシステムや組織である」（筆者訳）とされている。一方、日本の『広辞苑』（第六版）では、文化を「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ科学・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む」と定義している。両者の共通点は、①人間がみずから手で、②築き上げてきた有形・無形の成果の総体ということである。

総じていうと、文化の本質は人間の力によって創られたすべてのモノゴトである。人間の力を加えないかぎり、文化にならない。例えば、自然状態の山や土は、そのままでは文化とは言えない。しかしその山を「富士山」や「黄山」と名付け、土を「土壁」や「城壁」に変

えれば、文化になるのである。

## 1.2 文化の分類

従来文化の分類は基準の曖昧さにより、さまざまであり、まだ定説になっていない。本稿では、文化の本質から、ヒトとモノの関係によって文化を大きく物質文化、制度文化、精神文化と分けることに従う。すなわち、

物質文化：ヒトとモノの関係で、衣食住など物質的なもの。

制度文化：ヒトとヒトの関係で、家族や民族など制度上のもの。

精神文化：ヒトと自身の関係で、文学芸術や宗教信仰など精神面のもの。

ということである。物質文化は人間が行動した上での物的産物で、最も具体的で文化の表層である。制度文化はいわゆる人間関係からなる行動規範、組織形態のもので、文化の中層である。精神文化は人間の精神活動から生み出されたもので、文化の最も深層である。

## 1.3 文化の影響要因

マルクス主義の史的唯物論では、文化を含む社会的意識は、社会的存在によって規定されていると主張される。本稿はこれを基に文化の影響要因を分析する。一国・一民族の文化は、ある特定の自然環境や社会環境に適応・整合した結果である。

したがって、ある国・民族の文化を理解、解釈するには、その国・民族の存在する環境から始めなければならない。つまり、文化の発展に影響を与える要因は自然環境と社会環境である。自然環境には地理的条件や気候など、社会環境には歴史的・政治的・経済的などの要因が含まれている。

文化の決定的要因は自然環境の地理条件や気候にあると考えられる。例えば、日本と英国は同じく島国であるのに、両国の文化は完全に違う。すなわち日本人が集団的、英国人が非集団的・自由的に見えるのは、日本では昔から火山や地震などの災害が多い自然環境においては集団的行動をしなければ生き残れない、一方英国がそうではないからであろう。

中国はユーラシア大陸の東端、太平洋の西岸にあり、960万平方キロメートルの国土を持っており、世界の陸地面積の約15分の1、アジア州の面積の4分の1を占めている。中国伝統文化の発祥地の内陸部・中原地区が大陸性気候である。また中国は多民族で、物産に富んでいるため、常に「地大物博（土地は広大、物資は豊か）」が誇りに思われる。一方、日本はアジアの東方海上、太平洋の北西部にあり、国土面積が37万平方キロメートル余りである。典型的な島国で、資源が少なく、自然災害が多い。大半の地域が温暖湿潤気候に属する。このような自然環境のもとで育まれた中日の伝統文化は、それぞれ大陸性と海洋性の特徴があることは想像に難くない。

中国と日本は、いわゆる一衣帯水の隣国で、中国の伝統文化が古くからずっと日本に取り入れられており、両国文化の共通点が多いことは事実である。ゆえにそれを対象にした研究が多く見られる。しかし、両国文化の相違点、特に自然環境の視点からみる相違点に注目した研究がほとんど見られない。本稿は中日の伝統文化を大陸性と海洋性の相違点から、その全体像の比較研究を試みたい。

## 2. 物質文化における相違点

### 2.1 服飾文化

服飾とは、人がその身体の上にまとう衣服や装身具（装飾品）類、またそれらの組み合わせの様式である。服飾は自然環境（気候等）や社会環境（政治体制・経済状態・宗教・戦争の有無等）に順応したものである。

中国の伝統的な衣装といえば、漢服とチャイナドレス（旗袍チーパオ）があげられる。漢服は清以前の全ての中華王朝の服装であると思われる。襟を右前で交差させ、袖口が広くて長く、ボタンは紐ボタンを使い、歩く時のさやさや揺れる感覚が漢服の特徴である。チャイナドレスはそもそも満洲人の民族衣装で、満州人の支配した清王朝が最後の中華王朝であるため、中国を代表する服装になるのである。一般的に詰襟で腰から下は両脇で長いスリットになっており、女性が着るボディコンシャスなワンピースである。なぜ深いスリットが入るかという、満州人が騎馬民族で動物に騎乗する際に脚を横に出し、前からの風を防ぐために、スリットが設計されたからである。漢服にせよチャイナドレスにせよ、その服に刺繍された図案は、龍鳳・牡丹・鳥獣（鶴、虎）・万寿字など中国大陸にのみ存在するものばかりである。

日本の民族衣装は、唐時代の漢服に強く影響を受けた和服（着物）である。和服は日本で発達した衣服で、広義には日本で古くから用いられてきた様式の衣服すべてをさすが、狭義には長着、羽織、帯、長襦袢（じゅばん）、肌襦袢、裾除（すそよ）け、コート、男子にはさらに袴（はかま）、褌（ふんどし）が含まれ、ほかに和装具として足袋、履き物などが加わるものである。長着を身体にかけ、帯を結ぶことによって着つけ、漢服と同じく袖口が広くて長いのが和服の特徴である。また、女性と子供用の和服には「身八つ口」という通気孔がついており、袖・襟・裾などの部分が自由に開閉できて、優れた換気性を備えている。服に描かれた図柄は、一般的に椿・桜・蝶・辻が花など四季を象徴するものである。和服のほか定番になるものは下駄と足袋とがある。

中国でチャイナドレスに長いスリットがデザインされるのは、内陸騎馬民族の利便性を求めたためであり、また伝統衣装に刺繍された図案も大陸性の表れである。日本は和服のゆったりとした構造及び下駄・足袋を履くことが、湿度の高い四季のはっきりした気候に適しているためである。冬に暖かくて、夏は高温多湿のため風通しのよい涼しい素材を用いたり、首まわりが密着していないので苦しくないうつくりになったりするのである。

### 2.2 飲食文化

飲食文化とは、食事に関することであり、食材の選び方、献立の立て方、調理法、食器の選び方などの要素が含まれる。中国の俗語「民は食を以て天と為す」（人民には食べ物が一番大事なこと）のごとく、飲食文化は物質文化のなかで、重要な位置を占めている。民族、地域、時代によって、使用される食材や道具が大きく異なり、調理の方法にも差がある。さらに気候の制限で入手可能か否かによって食材の差もある。つまり、飲食文化は地理的条件・自然環境によって異なり、各国・各民族の特色を出している。

周知のように、中国料理は世界三大料理の一つで、食材の多さ、調理法の複雑さと味のおいしさで有名である。食材は「4本脚のものならイスとテーブル以外、飛ぶものなら飛行機以外はなんでも食べる」というほど、豚・牛・羊・犬をはじめとした、動物の肉や内臓から、シイタケ・タケノコ・キクラゲなどの植物まで、さまざまである。調理法は炒め、揚げ、蒸し、煮込み、焼きなどで複雑。調味料は塩・砂糖・味噌・醤油・酢のほかに、八角・桂皮・花椒・丁香などが使われて、独特でおいしい味になる。海に面する地方では古くから魚貝類を生食する風習があったが、13世紀に遊牧民が勢力を得て、元の時代になってからは生食の習慣はほとんどなくなったといわれている。野菜の豊富な平野ではその食べ方が研究され、また砂漠地方や山岳地方など暑熱、寒冷の厳しい地方では、それぞれの条件に適した食生活が、調理による医療も加えて長年の経験から研究されている。いまなおその原形を失わずにそれぞれ地域名を付した料理として、各地方独自の特徴ある四大・八大料理が発達している。

日本料理は日本の風土で独特に発達した料理であり、食材が魚介類で生で食べるのが特徴である。『日本水産白書』（平成28年度）によると、平成27（2015）年度魚介類の国内消費量は、767万トンで、1人当たりの魚介類消費量が、世界の高水準となるそうである。また日本貿易振興機構JETROが2013年12月に6都市で実施した調査によれば、外国人の好きな日本料理が寿司と刺し身で、35.3%とトップの人気だったそうである。そのために日本料理の代表は寿司と刺身といえる。どれも魚を原料とした料理である。多種多様な魚をそのまま食べるのが日本料理の一般的な食べ方である。また四季に応じた新鮮な食材の使用、見た目の美しさが日本料理の特徴でもある。魚食文化の繁栄に伴い、日本の水産物の産地では魚を中心としたさまざまな祭りが行われる。例えば石川県輪島市の「あわびまつり」、三重県志摩市の「伊勢えび祭り」、北海道の「天売ウニまつり」など。

食材と調理法からみれば、中日飲食文化の大きな違いは、その大陸性と海洋性にある。中国は古く数千年の歴史と、広大な土地と、多くの人口、多くの民族を有する大国である。しかも、海に面する南東部の平野には、黄河、長江などの大河が流れ、その流域は広い平野で、農産物や水産物が豊富である。奥地には砂漠地帯あり、山岳地帯ありで、住む人々も多様性に富む。こういう農耕文化の育まれた陸地環境に恵まれた中国料理の複雑さ・おいしさが理解しがたいとは言えない。一方、日本は海に接している距離が長く、黒潮や親潮が流れ、春夏秋冬それぞれの魚がやってくる。真ん中に山脈が走るため、雨が降ると動物性プランクトンを含む水が山から川、川から海に流れて魚のエサとなる。地理からみても生活環境からみても魚食民族である。

### 2.3 建築文化

建築とは、建築物をつくる人間の行為、あるいはその行為によって作りだされた建築物を指す。建築は人々の仕事と生活のニーズを満たすための物質材料の一つであり、人々が日常生活を行う大事な場所である。際立った民族のおよび地域的な特徴を有している。異なる地理的環境、気候、雨量、風向き、日照などの自然条件が建築に大きく影響を与えて、カラ

フルな建築様式を形成する。たとえば、生まれ育った風土が温暖であれば、そこに住む人間は環境をいたわり守りつつも、知的に建築化して支配する態度をとる。生気なく乾燥し、荒涼とした風土であれば、外界に対し意志的、対抗的になる。

中国の伝統的な建築は古代王朝の建築と民間的建築とに大別される。王朝的建築には、城郭・宮殿・壇廟・陵墓・仏寺・石窟・庭園等の種類がある。中でも宮殿と庭園が最高の傑作であり、広大な皇宮建築は政権基盤を打ち固めるための道具ともされていた。広大な規模を誇る故宮は極めて壮観である。皇宮の中心部である紫禁城だけでも、東西 760 メートル、南北 960 メートル、建築面積 72 万平方メートルに及ぶ。中国の古代王朝の建築の特徴は、『無上の帝王権利』という思想と厳密な等級観念を明らかに示すこと、宮殿建築と都市規制の成果が一番高いこと、総合的な美しさ、建築群は中軸対称式の庭園配置を採ることである。

一方、民間的建築は、最も基本的な建築形式で、数が最も多く、分布が最も広く、同時に最も地方的特色を持ち、自然条件の制約を受ける。中国北方の黄河流域では、古人は木材と黄土で家屋を造り、南方では、建築材料は土と木のほか、竹や芦なども使われている。その代表的な物としては、四合院、窯洞（ヤオトン）、炕（カン）、杆欄式住居などがあげられる。四合院は庭とその東西南北の四棟の建物で構成され、中国北部によく見られる住宅である。窯洞（ヤオトン）は穴を掘ることで作られ、中国西北部の黄土高原に普遍的に見られる住宅である。炕（カン）は主に東北部で常用されるかまどの排気を床下に通して部屋を暖める床暖房である。杆欄式住居は中国南部（広西・湖南・貴州・雲南）の少数民族によって夏の暑く多雨で、湿気の多い気候に適して作られた木造建ての高床式住宅である。

日本の伝統的な建築は、中国建築から影響を受け、木造建築が主流を占める。中国と同じく、王朝的建築と民間的建築の二つに大きく分けられる。王朝的建築の代表は宮殿、城郭、神社・寺院などがある。雄大な中国の王朝的建築に対し、洗練さ、優雅さを持ち、建築構造の構造美と材料の質感の表現に長けている。一方、伝統の民間的住宅は、種類が中国ほど多くないが、風土・気候に適するように造られる。伝統の家屋は木造で、地盤を地面より少し高くしており、部屋の周りとは下の方の空気の通り状態をよく保たせる。和室には、畳が敷かれて、ふすまや障子によって仕切られる。わらでできた畳と紙・木枠でできたふすま・障子は、吸熱調湿の効果を持っている。また面積の狭さに対応し戸やふすまを開け放して部屋を広く使えるように工夫される。

中国は領土が幅広く、地形が多様で、民族が多いため、中国の伝統建築は広大で帝王の権力を強調する王朝的なものから、多種多様な大陸性気候に適する民間的なものまで、実に豊富多彩である。日本の伝統建築は、中国の影響を受けたものの、独自の特色を持っている。中でも日本の伝統的家屋には、高温多湿な気候に対しての快適性と建物自体の耐久性という特色がある。

### 3. 制度文化における相違点

#### 3.1 家族

家族とは、婚姻によって結びつけられている夫婦、およびその夫婦と血縁関係のある人々で、ひとつのまとまりを形成した集団のことである。家族関係には、婚姻によって生じた夫婦関係、「産み、産まれる」ことによって生じた親と子という血縁関係、血縁関係(など)によって(直接、間接に)繋がっている親族関係、また養子縁組などによって出来た人間関係等々がある。

中国の伝統的な家族の理想型は合同家族である。合同家族とは、成人した子供(男子)が結婚後もその妻子とともにすべて親の家にとどまって生活する家族類型をいう。中国の家族は、家族の上位集団をなす宗族の一部とみることもできる。宗族は同じ出自集団とみなされる同姓集団であり、同姓の家族は原則として同じ祖先をもち、同じ宗族の一員と考えられている。そして現実には、同じ地域に住む同姓の家族が宗族としての結合意識をもち、祖先祭祀や相互扶助などを行っている。日本と異なり、「同姓不婚、異姓不養」という決まりがあり、養子を迎える場合にはかならず血縁者でなければならない。血縁のない人が決して家業を継ぐことができない。家族内における男女の地位は、典型的な男尊女卑で、男性のほうがはるかに高い。その例としては、女性を苦しめる纏足の風習が何百年も続いていたことである。纏足の女性はいまも歩けないことから、貞節を守ることができて、女性支配の手段になっていたと考えられる。妻が結婚後も夫方の姓を名のることなく、生涯にわたって自己の出自の姓を保持するのは、家族への所属よりも宗族への所属を重視することの表れである。家族生活は親孝行に代表される儒教倫理によって根強く支配されており、伝統的な中国家族では家父長的な色彩が強かった。

日本の伝統的な家族は、直系長子相続を軸として家名・家督を継ぎ、三世代にわたる大家族の形態をとり、そのもとで夫と妻、親と子、男子と女子、嫁と舅・姑の人間関係が構成される。家庭内の男女の地位は、中国と同じく男尊女卑であるが、女性の地位がやや中国の女性より高いと思われる。阿部一(2014)は、古代日本の家族システムは、母性優位の平等核家族であったと指摘している。古代日本では、夫が妻の下に通う「妻問婚」は、古墳時代から平安時代まで長期間存在していた。「妻問婚」では、子の養育は母の一族が行うものであり、夫方の一族が介入することはできなかった。女性の特権と中心的地位を示したといえる。日本の伝統的な家族では、中国のように男性を喜ばせ、女性を苦しめた纏足の風習が始終ないことは、その好例である。

中日の伝統家族における、このような宗族重視・女性軽視と母性優位の文化的相違があるかどうかは、依然として自然環境の相違によったものであろう。古代中国は、典型的な農耕社会で、人口の移動が少なく、固まった地域での暮らしをしなければならなかったため、血縁・宗族を重視するわけである。また、国土が広く人口が多いことに加え、儒教倫理に基づいた婦女の貞節を守らせるため、女性を纏足させることまであったのである。これと対照的に、日本の場合は、資源が乏しく、環境が厳しかったため、女性の労働力を重視しなければならない。

### 3.2 民族

民族とは、一定地域に共同の生活を長期間にわたって営むことにより、言語・習俗・宗教・

政治・経済などの各種の文化内容の大部分を共有し、集団帰属意識によって結ばれた人間の集団の最大単位のことである。ある民族に特有の性質、すなわち民族性は、ある国が単一の民族で構成される時には、国民性と等しい。歴史や気候、社会構造によって差がある。

中国は古代から多民族の国で、華夏、東夷、南蛮、西戎、北狄の五大民族グループから、現在56の民族まで発展してきており、漢族がずっと主流で、現在総人口に占める割合は92%で、少数民族の人口は8%である。漢族以外の55の民族は人口が相対的に少ないため、習慣上、「少数民族」と呼ばれている。したがって、中国の民族性・国民性とは、主に漢民族を主体とする中華民族・中国人の性格を言う。中国の国民性の中核には古くから、儒家思想の「中庸」意識が根深く存在する。中庸とは不偏不倚、過不及のない平常の道理で、道理は天に基づいて人間に本性として賦与される。本性に従って存養省察して喜怒哀楽の中和を得れば、天地は順応し万物は生育し、人間と自然の統一調和が保たれる。つまり、物事を判断する上でどちらにも偏らず、天人合一をとらえるものである。中庸意識の根源を遡ってみれば、中国大陸地域の多くは気候が、極寒でも極暑でもない温帯にあるからであろう。温和な気候の下に生活する人は、必ず極端を取らず、包容的・中庸的である。

日本はアイヌ族が存在するにもかかわらず、古くから単一民族国家とみなされている。「大和」民族と自称している。「大和」という言葉は、3世紀の大和政権から由来したという。最初の漢字は「大和」ではなく、「倭」である。そもそも中国史書の『魏志』や『後漢書』で日本を指す「倭」が、なぜ「大和」とされたのかといえ、それは日本が海に囲まれている島国であることによる。海洋が天然の障壁となり、外敵を恐れなかった。実は日本は歴史上外敵に侵入されたことがほとんどなく、13世紀に2度、モンゴルの短期的な強襲を受けたのみである。そのため、日本人にとって一番怖いのは外敵ではなく、内乱である。いざ内乱となれば、国土が細長くて、逃げる場所すらない。そのうえ、自然環境が厳しいので、日本人は結束してこそ生存できるであろう。ゆえに自分の住んでいる地域や集団の「和」を大切にしなければならないのである。

また、アメリカの文化人類学者のルース・ベネディクトは、『菊と刀』という著書において、「日本人は、好戦的なくせに平和思考、尚武的であると同時に審美的、傲慢にして丁重、融通が効かないくせに適応力があり、従順なのになめた真似をされると腹を立て、忠誠心があるくせに裏切り、勇敢だが臆病、新しい流儀に対して身構えるくせにそれを歓迎もする」と書き、日本人の国民性は極端な矛盾した二面性を持っていると主張した。その原因は、日本が古くから地震、火山、津波が多いためであろう。これらの自然災害は爆発する前に、特に海が穏やかな時に非常に静かで美しく見えるが、いざ嵐や津波となる時、恐怖極まりない光景へ変化する。したがって海のこのような極端な二面性は日本民族の文化遺伝子に浸透していると言えるであろう。

#### 4. 精神文化における相違点

##### 4.1 文学芸術

文学とは、言語によって人間の外界および内界を表現する芸術作品のことである。つまり人間の思想や感情を言語で表現した芸術作品である。ジャンルには詩歌・小説・戯曲・随筆・評論などがある。芸術とは一定の材料・技術・身体などを駆使して、観賞的価値を創出する人間の活動およびその所産である。ジャンルとしては絵画・彫刻・工芸・建築・詩・音楽・舞踊などがある。

中国の伝統的文学芸術における大陸性特徴は、山・川・水・田を題材とした山水田園詩や山水画の中に現れている。山水詩は山や川などの純粹叙景である。田園詩は、農村風景をその中で働く農民の姿を含めて歌う詩である。山水画は山水、樹木、岩石など自然の景観を描くもので、景物としては人物、楼閣、風俗、鳥獣などをも含み、四季と組み合わせられることがある。山水を題材とした山水詩画は、自然の中に人間界の苦悩と束縛とにわずらわされないユートピアが存在するという思想に基礎を置き、神仙思想と結びつき、人間界と隔絶した幽邃（ゆうすい）な山中に、神秘的な霊界を見いだそうとする傾向がある。

大きな山や川を有する中国と異なり、海に囲まれた日本列島の下に生まれた日本文学は、言うまでもなく、海洋性特徴を持っている。日本の文学作品は意識的または無意識的に航海、海洋探検、海外貿易などにかかわるはずである。早くも記紀神話の中に山幸海幸のことが書かれた。さらに「浦島太郎」の伝説も広く知られており、古代日本人の海洋への憧れと愛着を深く反映している。『土佐日記』、『平家物語』、『雨月物語』、『蟹工船』などの作品は、様々な角度から日本人と海洋のインタラクションを示している。

また、最も簡潔な言葉としての諺は、最も民族特性を表すことができる。中日の諺にはそれぞれ陸地と海洋に関するものが多い。たとえば、「少しの元手で、またわずかの労力により多くの利益を得る」という意味を表すには、中国語では「抛磚引玉」（れんがを投げて玉を引き寄せる）、日本語では「海老で鯛を釣る」という。「本来すぐれた価値を持つものは、おちぶれてもそれなりの値打ちがある」という意味を表すには、中国語では「瘦死的駱駝比馬大」（痩せて死んだラクダでも馬よりは大きい）、日本語では「腐っても鯛」という。

さらに、妖怪退治・勸善懲悪をモチーフとしたものには、中国の『葫芦兄弟（ひょうたん童子）』と日本の『桃太郎』とがある。『葫芦兄弟（ひょうたん童子）』において葫芦兄弟は、妖怪に連れ去られたおじいちゃんを救うため、「瓢箪山」という山で、妖怪と戦った。その一方『桃太郎』において桃太郎は、鬼に苦しめられた人々を救うため、「鬼ヶ島」という島で、鬼を退治した。

以上のように中日の文学・芸術には、作品の題材であれ、諺の喩えであれ、妖怪と戦う場所であれ、大陸性と海洋性を好対照に表している。

#### 4.2 宗教信仰

宗教とは、心の空虚をいやすために、常に超越的絶対者を信仰する精神的な活動である。すなわち神または何らかの超越的絶対者、あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事のことである。宗教という信念体系は、存在の秩序の象徴（宗教思想）、宗教体験、宗教集団という要素からなり、さらに、信念を表す行為が定式化され

て、非日常的な神聖な行為として宗教儀礼、祭礼となり、一方、してはならぬ行動は戒律となり、信念を日常生活において実践する宗教倫理が課せられる。

中国には歴史上古くから多種の宗教が併存した。仏教、道教、イスラム教、キリスト教などの諸宗教が存在しているが、代表的な民族宗教は道教である。道教は中国民族の固有の生活文化のなかの生活信条、宗教的信仰を基礎とした宗教である。初期の道教的信仰は、不老不死の神仙を希求したり、巫術や道術による治病や攘災に重点を置いたが、儒教や仏教と競合し、影響しあい、内的修養や民衆的道德意識の堅持を中心とする信仰をも重視するように発展した。道教の源流は、もともと戦国時代の斉の国における民間の巫祝（呪術師）による農作のための山川の祭りと、それを基礎にして王侯が農作を祈る八神（天主、地主、陰主、陽主、月主、日主など）の祀りによる山川の祭祀であった。また、古代中国神話に登場する人類を創造したとされる女神・女媧は、黄土を人の形にこねあげて、人間をていねいに1人ずつつくっていたと語られている。このような山川の祭祀と黄土で人間を創ることは、典型的な大陸性・大陸文化の象徴と言ってもよいであろう。

日本の民族的信仰は神道である。神道は儒教・仏教など外来の宗教・思想などと対立しつつ、しかもその影響を受けて発達し、山や川などの自然や自然現象、また神話に残る祖霊である神、怨念を残して死んだ者などを敬い、それらに八百万の神を見いだす多神教である。自然と神とは一体的に認識され、神と人間とを取り結ぶ具体的作法が祭祀であり、その祭祀を行う場所が神社であり、聖域とされた。神社に参拝する前に、心身を清める「禊祓（みそぎはらい）」が必要である。その起源は、『古事記』の阿波岐原でのイザナギ尊の禊祓に求められる。記紀神話に、イザナギとイザナミの二柱の神は天の橋にたち矛で混沌をかき混ぜ島をつくと記されており、黄泉の国から戻ったイザナギ尊が自らの体に付いた黄泉の国の穢を祓うため、海水で禊祓をおこなったことが記されている。このことが民間においては、「潮（塩）垢離（しおごり）」といって海水を浴びて身を清めたり、海水を沸した「塩湯（えんとう）」が、病気治療や無病息災のために用いられるといった風習に繋がっていった。また、日本の民間では普遍的に海神を信仰している。2.2節で述べた各地の魚祭りもそうであるが、現在でも、海の恩恵に感謝するとともに、海洋国日本の繁栄を願うという趣旨の祝日・「海の日」は、その信仰の印ともいえる。

## 5. おわりに

文化というものは、政治、経済などの概念より、一層根本的、安定的なものである。文化的特徴は国・民族の性格を示しており、ある国・民族をよりよく理解するためには、その文化を研究するよりほかはないであろう。中日両国の伝統文化の相違点を比較することにより、お互いの理解を深めることができると思われる。

以上、中日伝統文化の相違点を、主として大陸性と海洋性といった視点から、おおまかに検討を加えてきたが、今後相違点を細かく、原因を詳しく研究していきたい。本稿の要点をまとめてみると、次の表ができる。

| 伝統文化 |      |     | 中国                            | 日本                            |
|------|------|-----|-------------------------------|-------------------------------|
| 物質文化 | 服飾文化 | 代表  | チャイナドレス                       | 和服                            |
|      |      | 特徴  | ① 長いスリット<br>② 図案：龍鳳・鳥獣（鶴、虎）など | ① 身八つ口<br>② 図柄：椿・桜など四季の象徴     |
|      |      | 原因  | ① 内陸の騎馬民族の利便性のため<br>② 大陸だけの物  | ① 温暖湿潤気候に適応<br>② 四季がはっきり      |
|      | 飲食文化 | 食材  | 肉類、野菜                         | 魚介類                           |
|      |      | 調理法 | 多種多様、複雑                       | 生食                            |
|      |      | 原因  | 土地が広く物産が豊富で人口が多い              | 島国、漁場・水産物が豊富                  |
|      | 建築文化 | 代表  | 四合院、窑洞（ヤオトン）、炕（カン）、杆欄式住居      | 和室、畳み、ふすま、障子                  |
|      |      | 特徴  | 豊富多彩                          | 通風・吸熱・調湿効果の追求                 |
|      |      | 原因  | 民族が多く、大陸性気候に対応                | 高温多湿な気候に対応                    |
|      | 制度文化 | 家族  | 形態                            | 合同家族                          |
| 特徴   |      |     | 血縁・宗族重視、女性軽視（纏足）              | 母性優位                          |
| 原因   |      |     | 農耕社会、人口移動が少ない                 | 環境が厳しく、女性労働力の重視               |
| 民族   |      | 構成  | 多民族                           | 単一民族                          |
|      |      | 民族性 | 中庸                            | ① 「和」の重視。<br>② 二面性。           |
|      |      | 原因  | 極寒でも極暑でもない温帯地域                | ① 国土が細長く、内乱を怖がる。<br>② 海洋の二面性。 |
| 精神文化 | 文学芸術 | 題材  | 山水田園詩、山水画                     | 海洋にかかわるもの                     |
|      |      | 諺   | 「抛磚引玉」、「瘦死的駱駝比馬大」             | 「海老で鯛を釣る」、「腐っても鯛」             |
|      |      | 民話  | 『葫芦兄弟』の「瓢箪山」                  | 『桃太郎』の「鬼ヶ島」                   |
|      |      | 原因  | 大きな山や川を有する                    | 海に囲まれた列島                      |
|      | 宗教信仰 | 宗教  | 道教の神仙、山川祭祀                    | 神道の海水で禊祓。海神信仰。                |
|      |      | 神話  | 女媧の黄土で人類創造                    | 2神の国生み（島生み）                   |
|      |      | 原因  | 大陸性                           | 海洋性                           |

## 参考文献

### 日本語文献

- 『日本大百科全書(ニッポニカ)』小学館、1994年
- 阿部一「日本の伝統的家族・擬似家族システムとしてのイエの形成」東洋学園大学紀要 22、2014年

3. 大岡敏昭「中国の古代住宅の展開と日本住宅との関連性に関する研究」住宅総合研究財団研究年報(29)、2002年
4. 安田喜憲「魚食の文明・肉食の文明」日本研究 35巻、2007年
5. 和辻哲郎『風土—人間学的考察』岩波書店、1935年

中国語文献

1. 『辞海』商務印書館、1980年
2. 陳建憲『文化学教程』華中師範大学出版社、2004年
3. 陳華文『文化学概論新編』首都經濟貿易大学出版社、2009年